

第14章 リミタリアニズムと将来世代

著者: Tim Meijers

1. はじめに

「あまりに多すぎる」、「限界」という考えは、実践的に最も切迫した世代間問題を理解する上で中心的である。リミタリアニズム—あまりに多すぎることは悪いか不正義であるという考え—は、自然な適合のように思われる。

私たちは車を運転しすぎ、飛行機に乗りすぎている。肉と乳製品を食べすぎている。あまりに多くのものを買っている。その結果、CO2や他の温室効果ガスをあまりに多く排出している。私たち一集団として—はあまりに多くのエコロジカルスペースを占有している。

本章は、世代間文脈においてリミタリアンの見解のメリットと制約は何かを問う。

1.1 本章の目的と構成

リミタリアニズムがどのような種類の理論であるか—非理想的で部分的—を考えると、それが世代間正義の完全な理論を提供することを期待すべきではない。本章の目標は主に探索的である:リミタリアニズムが直面する機会と課題を問い、世代間リミタリアニズムがどのようなものでありうるか、またあるべきかの輪郭を描く。

今日私たちが直面する最も切迫した課題のいくつかが世代間次元を持つことを考えると、リミタリアニズムについて二つの質問をすることには意味がある。

第一の質問:世代間の懸念はリミタリアニズムの正当化を強化するか?世代間正義に関する懸念は、リミタリアニズムを受け入れる追加的理由を与えるか?

第二の質問:将来世代への懸念を取り入れることは、私たちが直面している最も切迫した世代間課題に適合するリミタリアニズムを発展させるのに役立つか?

本章の構成:

1. 経済的リミタリアニズムの紹介(第2節)
 2. リミタリアニズムの主要な論証が相当な世代間牽引力を持つことの論証、および配分原則に関する問題の提起(第3節)
 3. 環境正義と環境限界をカバーするためのリミタリアニズムの修正の必要性(第4節)
 4. ロールズにインスパイアされた世代間リミタリアニズムの防御の試み(第5節)
-

2. 経済的リミタリアニズムの紹介

2.1 リミタリアニズムの核心

リミタリアニズムは、人々が非常に裕福であることは不正義(または悪い)であるという見解である。誰も特定のライン、リミタリアン閾値を超える富を持つべきではない。

2.2 主要な二つの論証

第一の論証:民主的平等の論証

- 大きな分配的不平等は民主的平等を脅かす

- 金銭は権力を伴い、政治を腐敗させうる

第二の論証:未充足ニーズの論証

- 金銭は他の場所でより多くの善をなしうる
- 例:グローバルな貧困、不利益、または集団行動問題への取り組み

2.3 リミタリアン閾値の特定

アプローチ1:豊かさライン(Riches Line)

「豊かさライン」のようなものがあると論じることができる—それを超えると、より多くの金銭は保有者に何の道徳的価値ももたらさない。言い換えれば、ある時点で、より多くの富は私たちの客観的ウェルビーイングに何もしない(私たちはより多く持ちたいかもしれないが)。

豊かさラインは飽和可能性(satiability)を仮定する—現金を客観的ウェルビーイングに変換する私たちの能力の限界。

特徴:

- 誰かが財産Fを持ち、その金額Nが豊かさラインを超えているとする
- 金額N-1(ドル、ユーロ、何でも)を奪っても、道徳的に重要な意味で彼らの利益を後退させることはない(彼らはそれを好まないかもしれないが)
- リミタリアン閾値は豊かさラインと一致しうる:人々は豊かさラインを超える富を持つべきではない

アプローチ2:独立した閾値

豊かさラインとは独立して(そしてそのようなラインが実際に存在するかどうかとは独立して)リミタリアン閾値を擁護することもできる。

このような閾値は以下のように定義されうる:

- **絶対的条件**で定義される
- **相対的条件**で定義される:多くの正義関連財の位置的性質を考えると、「あまりに裕福」とカウントされるかどうかは、他者がどれだけ持っているかに依存する

2.4 経済的リミタリアニズムの特徴

焦点:金銭または貨幣価値で表現可能な資産

- 非常に裕福な人々は余剰富を手放すべき、または課税されるべき
- または、彼らがそれほど裕福にならない経済システムに移行すべき

分析単位:個人

- 国家、世代、または企業の保有ではない
- より大きな分析単位は家族(Robeynsの初期定式化)だが、この場合でも家族の一人当たり保有が重要
- 特定の人だけが「あまりに多すぎる」ものを持ちうる

理由:

- 平均一人当たり保有を見ると、グループの異なるメンバーが異なる金額を保有しているという事実を見逃す
- 資産がメンバーのサブセットの手に集中している場合、平均的にはあまりに多すぎる一方で、個々のメンバーはあまりに少なすぎるかもしれない

貢献者中心:

- 裕福な人々に焦点を当てることで、再分配の受益者から、それを支払う人々へと注意を移す
- 貢献者に焦点を当てる(受益者関連の理由で)

部分的で非理想的な正義理論:

- 分配的正義の完全な理論を提供することを期待すべきではない
- むしろ、私たちが互いに負っているものに関するより大きな絵の一部
- 行動指導的で、世界を正しい方向に動かすための結集旗として機能する

理論的軽さ:

- 正義が正確に何を要求するかについての合意を必要としない
- 非常に異なる正義観を持つ人々が以下に同意しうる:「重要な普遍的に支持される目標を前進させるために金銭を再配分しなければならないなら、膨大な量の富を持つ人々の犠牲においてそうする方が望ましい。彼らは何も、またはごくわずかしかなし失わない」

3. 経済的リミタリアニズムと将来世代

3.1 現在のリミタリアニズム議論の時間的焦点の限定

現在のリミタリアニズムに関する議論は、限定的な時間的焦点を持つ。リミタリアニズムを擁護する人々は、現在極めて裕福な人々が保有する富と、代替的分配を通じて対処されうる現在の社会的病弊に主に目を向けている。

本節は、経済的リミタリアニズムの世代間側面を探究する。ここでは、年齢グループ(老人と若者)間の正義ではなく、出生コホート(重複するかしないか)間の正義に焦点を当てる。

中心的問い:世代間正義の観点から、経済的リミタリアニズムを支持する理由があるか?

リミタリアニズムの二つの主要な論証の世代間含意を別々に見ていく。なぜなら、それらは異なる性質の論証であり、異なる含意を持ち、異なる閾値を生じさせる可能性があるからである。

3.2 民主的論証と将来の人々

3.2.1 民主的平等論証の核心

富への限界の第一の論証は、極端な富が民主的平等に及ぼす効果に焦点を当てる。Robeyns(2017)は、Christiano(2012)などに基づいて、以下のように論じる:

極めて裕福な人々は、自分たちにとってほとんどまたは全くコストをかけずに、政治過程に影響を与えるために多額の金銭を費やすことができる(そして実際に費やしている):

- 政党やロビー組織への寄付
- 有権者への影響の試み など

これは民主主義への脅威である。民主的社会において、市民は概ね平等な発言権(または少なくとも発言する概ね平等な機会)を持つべきである。極端な富はこれを脅かす。

そして自由主義理論家にとって、民主的平等は最も重要であり、経済的考慮に優先する(例:Rawls 1971)。

リミタリアニズムの効果:

- 富への限界は、富の不平等から生じる権力の不平等を減少させる
- 豊かさラインまたは相対的リミタリアン閾値を受け入れるかによって、億万長者は余剰富を奪われても繁栄の点で何も、または少なくともごくわずかし失わない
- リミタリアニズムが非常に低い道徳的コストで民主的平等を大きく前進させることを考えると、これは容易な選択である

3.2.2 世代間文脈における民主的論証

一見すると限定的な役割:

一見すると、民主的平等は私たちと将来の人々の間で限定的な役割を果たす:

- 私たちは同じ選挙で投票しない
- 直接的に同じデモス(demos)のメンバーではない
- 私たちが将来世代に対して権力を行使するのは、時間の一方向性のため
- 彼らが私たちに対して持たない方法で私たちが将来世代に対して権力を持つという事実は避けられない

位置的善としての政治的権力:

政治的権力は、そして民主的平等とともに、位置的善である:

- 重要なのは、関連する他者と比較してどれだけの権力を行使できるか
- 私の政治的権力の取り分の価値は、他者が行使する政治的権力の量に部分的に依存する
- しかし、民主的平等に関する懸念が適用されるのは、同じ状況で政治的権力を行使する人々との関係においてのみ

例:ユリウス・カエサルが同時代人と比較して恐ろしい量の政治的権力を保持していたという事実は、オランダ市民としての私の平等な地位には何もしない。

民主的平等の問題が生じるためには、ある意味でポリティ(政治体)を共有しなければならない。民主的平等の観点から重要なのは、特定の時期に特定の社会で一緒に暮らす人々が、ほぼ同程度の政治的権力を行使することであると考えられるかもしれない。

結論:もしこれが正しいなら、民主的論証の時間的範囲は限定的である。民主的平等は一見すると、共時的(synchronically)に重要であり、通時的(diachronically)には重要ではない(少なくとも非重複世代間では)。

3.2.3 民主的不平等の何が悪いのか

リミタリアニズムの民主的論証に関する文献は、民主的不平等の何が正確に悪いのかについてはほとんど述べていない。これは非理想的見解にとっては理にかなっている:ほとんどの人が民主的平等が最も重要であることに同意している。これは非理想的理論が支持を集めるには十分である。

しかし、私たちの目的のためには、この質問についてもう少し述べるのが有益である。民主主義または民主的平等の価値に関する内在的論証と道具的論証を区別できる。

内在的論証:

- 民主的不平等は内在的に悪い
- 一部の人が他者よりも政治的影響力の大きな機会を持つことは間違っている
- 民主的正統性は、法に従う全員がある意味でその法の共同著者であることを要求すると考えるかもしれない
- これは決定された法の内容とは独立している
- たとえ不平等な政治的影響がある客観的基準によってより良い決定をもたらしたとしても、その決定は民主的正統性の観点から問題がある

道具的論証:

- 民主的不平等は、それが悪いまたは不正義な決定をもたらすから悪い
- これは民主的不平等に関する道具的懸念である
- 認識論的理由かもしれない(おそらく周縁化されたグループの視点を見逃した)
- または道徳的理由かもしれない(一部を排除することが決定を歪め、周縁化された人々を不利にした)
- 法はより効果的でない、またはより正義でない(または両方)かもしれない

3.2.4 道具的論証の世代間牽引力

道具的論証は世代間文脈において明確な牽引力を持つ:

民主的に平等な社会が将来世代に関して(道徳的にまたは認識論的に)より良い決定を下すなら、民主的平等を保護する道具的理由がある。

現在の決定の将来への影響:

今取られる決定は将来の人々に影響を与える。例えば、裕福な人々が規制緩和をロビーするなら、化石燃料の領域などで、これは将来世代に悪影響を及ぼす。

この意味で、いつでもどこでも極端な富の存在は、今も将来も、あらゆる場所で民主的平等への脅威でありうる。なぜなら、それは多くの富を持つ人々に、自分たちに有利に意思決定を避ける機会を与えるからである。

結論:

現在の決定の将来への帰結:大きな不平等が、将来世代の権利(または道徳的に重要な利益)を脅かす決定の(増大したリスク)を生み出す限りにおいて、私たちはリミタリアニズムを支持する世代間理由を持つ。

3.2.5 経験的証拠

条件が成立するかどうかは経験的問題だが、そうであると考えられる理由がいくつかある:

理由1:歴史的傾向

- より平等な社会は、歴史的に危機に直面してより適応的である傾向がある

理由2:実際の行動

- 多くの非常に裕福な個人が、有害な産業の規制に積極的に反対している
- 最も不利な立場にある人々に利益をもたらす税に反対している
- 科学的言説を積極的に歪めている

例:気候否定論者や誤情報への資金提供の数十年は、産業からの頑固な反対によって部分的に先導された。このようなものがなければ、気候変動によって生み出された課題に直面してより良く行動できた、またはより良く行動できたと合理的に考えることができる。

ただし:金銭は複数の方向に働きうる。億万長者が善い目的のために金銭を使う——一部は実際にそうしている——ことは考えられなくはない。

しかし、私たちは、裕福な人々が特定の方法で金銭を使うという善意に依存したくはない。彼らが途方もなく損害を与える方法で行動するかもしれないというまさにその事実が、彼らができないように確実にする十分な理由であると考えられるかもしれない。

リミタリアンの観点からは、代わりに富を奪うことによってそれが善い用途に充てられることを確実にできるなら、賭けをする必要はない。

3.2.6 内在的論証の世代間適用

将来の人々は名目上私たちと同じポリティに住むかもしれないが、私たちは一緒に決定を下していない。将来のオランダ人は私のようにオランダに住んでいるが、私たちは一緒に決定を下さない。将来の人々は(定義により)存在しないので、投票できない。位置性の懸念は、私たちと将来の人々の間では適用されないように思われる。

しかし、これは内在的懸念が完全に沈黙していることを意味しない。

将来の民主的平等への脅威:

現在極めて裕福な個人と将来の個人の間の富の不平等が直接的懸念ではないとしても、将来における極端な富は将来の民主的平等への脅威でありうる。

ロールズは、世代間正義は将来世代に安定した正義な制度を引き渡すことを要求すると論じる(Rawls 1971, セクション44)。ロールズの世代間正義理論は十分に要求的ではないと論じられるかもしれないが(例:Gaspart & Gosseries 2007)、確かにこれは私たちが将来の人々に負っているものの一部である。

将来世代に正義な制度を引き渡すことは、将来の人々が民主的平等者として生きることができる制度を引き渡すことを要求する。

民主的不平等の定着論証:

これがリミタリアニズムの民主的不平等の定着論証である:今日の不平等は将来において持続し、平等者の将来の社会を損なう。

世代間の富の蓄積:

- 富は世代間で蓄積する傾向がある
- 大きな財産はしばしば遠い過去まで遡ることができる
- 裕福な家族は自分たちのメンバーのために機会を蓄え続けることができる
- 世代間の富の蓄積は不平等を深め、定着させるかもしれない

たとえ王朝的富の世代間連鎖を断ち切る方法があったとしても(例えば高い相続税を通じて)、大きな不平等を持つ社会を移転することは、将来の市民が民主的平等者として生きる能力を損なう。

結論:

今日極端な富を制限すること—王朝的にまたは大きな不平等を可能にする経済システムを変えることによって—は将来における富の不平等を制限するだろう。そして富と政治的影響力の間の繋がりを考えると、これは将来の民主的不平等を弱めるだろう。

将来世代に民主的平等を負っているなら、極端な富のない社会を彼らに移転することを将来世代に負っている。

将来の共時的不平等: 将来世代のメンバーが彼らの世代内で互いに平等者として関係することができることが重要である。今経済的不平等を制限しないことが将来における民主的不平等を定着させる、またはさえ増大させる限りにおいて、私たちは世代間正義の理由からリミタリアニズムを受け入れる理由を持つ。

内在的根拠に基づいて、将来により少ない極端な富があることを確実にする理由がある。なぜなら、それは将来における正義な民主的制度を脅かすからである。これはリミタリアニズムの正当化を強化する。

3.3 未充足ニーズの論証

3.3.1 未充足ニーズ論証の核心

リミタリアニズムの第二の論証は、未充足ニーズの論証である(Robeyns 2017)。ここでの論証は不平等に訴えるのではなく、余剰金銭でなされうる善に訴える。

億万長者は、余剰富を失っても重要なもの(または相対的閾値を受け入れるならごくわずか)を失わない。しかし、それがよく使われるなら、他者は得るものが多い。

余剰富は、最も少ない人々の手にあればより多くの善をなしうる。なぜなら、それは未充足ニーズ、例えば食料、住居、就学のような基本的ニーズに対処できるからである。

一見すると現在中心:

再び、一見するとこの論証は現在裕福な人々と現在困窮している人々に焦点を当てている。しかし、未充足ニーズ論証を世代間条件で現金化できる。

将来の欠損の防止:

私たちは将来における欠損を防ぐ必要がある(例:Caney 2010)、このためには資源が必要である。気候変動、資源枯渇などにより、将来の人々は基本的ニーズの充足が危険にさらされていることに気づくかもしれない。これは緩和と適応を通じて部分的に防ぐことができるが、これは重要な投資を必要とする。

3.3.2 将来世代への範囲の拡張に関する懸念

未充足ニーズ論証の範囲を将来世代を含むように拡張できるか?一つの懸念は、将来の基本的ニーズは現在の基本的ニーズと同じではないということである。

課題:

将来世代のメンバーの道徳的地位と、将来の人々へのニーズと危害について話すことの結果的困難さに関する課題を括弧に入れたとしても、将来世代の場合は困難を提起する(Meijers 2018)。

- 私たちが今取る行動が誰かの基本的ニーズを充足するのを助けるかどうかを、相対的确实性をもって決定できる
- しかし将来、特に長期について考えるなら、不确实である
- 悪い結果が実現する可能性があり、誰のためにそれが実現するかは分からない
- 私たちが確率を扱っているという事実は、将来世代の利益を割り引く理由かもしれない
- 将来の苦しみは起こるかもしれないが、現在の苦しみは起こっている
- 今未充足ニーズを充足することは、将来における可能な、またはさえ起こりそうな未充足ニーズに優先しなければならないかもしれない

3.3.3 リミタリアニズムの部分性への訴え

一つの前進の道は、リミタリアニズムが完全な理論であると主張していないことを指摘することである。余剰富のいくつかの可能な宛先に異なる重みを割り当てることは、リミタリアニズムが答えなければならない質問ではない。私たちは単に両タイプの未充足ニーズに対処する理由を持つ。

それ以上に何が—もし何かあるとして—重要であるかを言うのはリミタリアニズムそのものの役割ではない。

しかし部分的な答えにすぎない:

現在と将来世代の利益は非常にしばしば一致している(例えば国連持続可能な開発目標で正しく強調されている)が、常にそうではない。

問題:

1. **余剰富の不足:**現在と将来の懸念の規模を考えると、両方を行うのに十分な余剰富がないかもしれない
2. **配分の必要性:**注入者として裕福な人々からどこで金銭を得るかに焦点を当てる見解として、リミタリアニズムは、それがどのように使われるべきかについてはほとんど教えない

しかし、ここではかなりのことが危機に瀕している。基本的ニーズ論証は(主に)前向きの帰結主義的条件でリミタリアニズムを正当化する:限界はより望ましい結果をもたらす。これはより良い結果がどのようなものかについての見解を前提とする。

3.3.4 帰結主義的論理とその問題

未充足ニーズの論証の帰結主義的傾向を追求して、私たちは金銭を使う方法の影響を最大化すべきかもしれない。より多くの基本的ニーズが充足され、現在繁栄していないより多くの人々が繁栄することを确实にする。

将来の人々のウェルビーイングに割引率がない場合の問題:

世代間倫理における別の古典的問題が生じる。大きな災害が起こらない限り、現在の人々よりも多くの将来の人々がいるだろう(例:Rawls 1971, pp. 286-287)。

したがって、将来志向の措置は、単に私たち(現在の人々)が数で劣るという理由で、今日の貧困に対処することを目的とする措置よりも効率的かもしれない。

過度の蓄積の問題:

さらに、「人口の規模を変数として取り、資本の高い限界生産性と非常に遠い時間的地平線を仮定するなら、総効用の最大化は(少なくとも近い将来において)過度の蓄積率をもたらすかもしれない」(Rawls 1971, p. 286)。

帰結主義的論理の帰結:

配分原則への限界の賦課の帰結主義的論理に従うことの帰結は、将来の人々により少ない道徳的重みを割り当てることを正当化できない限り、将来が現在に優先されるということかもしれない(Lippert-Rasmussen 2012も参照)。

3.3.5 リミタリアンは非人格的帰結主義を受け入れないだろう

リミタリアンプロジェクトの中心にある懸念を考えると、リミタリアンが非人格的形態の帰結主義を受け入れることはありそうにない。

非人格的帰結主義の特徴:

そのような見解は、正のウェルフェアを持つより多くの人々がいることに重要性を割り当てる:

- 将来の人々がうまくやることに価値を割り当てるだけではない
- 将来の人々がいることに価値を割り当てる(そして彼らがより少ないよりもより多くいるという事実)

リミタリアンの立場:

リミタリアンは、より多くの人々がよい生活を送ることではなく、人々の生活がうまくいくようにすることを気にかける傾向がある。

リミタリアン見解が資源主義的、ウェルフェア主義的、またはケイパビリティタリアンであろうと、リミタリアニズムは既存の不正義を出発点として取るため、人に影響する理由を強調する。

しかし問題は残る:

将来世代のメンバーを含む人に影響する見解を受け入れたとしても、将来の人々が平等な道徳的重みを持つなら、私たちは将来を優先すべきだという含意が続く。

私たち一現在存在する人々—は数で劣る。これは問題のある結論かもしれないが、一部はそれを受け入れている。

帰結:

リミタリアニズムが、今存在する世界の最悪の不正義に対処したい人々のための結集の印であることの代わりに、もはや主に現在世代のニーズに関心がない将来焦点の立場に行き着くことになるだろう。

これらの考慮の帰結は、リミタリアニズムがどのような配分原則と組み合わせられるかを知らない限り、世代間リミタリアニズムが魅力的な見解であるかどうかを判断するのが難しいということである。

「リミタリアニズムは部分的見解にすぎない。まずリミタリアニズムについて合意し、金銭をどのように使うかについては後で話そう」と言うことは選択肢ではない。

リミタリアニズムが(部分的に)帰結主義的根拠で正当化されるなら、私たちはそもそもリミタリアンであるべきかどうかを決定するために、より良い結果とより悪い結果をどう区別するかを知る必要がある。

3.3.6 超裕福層の環境への影響:偶発的論証

富への限界が将来世代に利益をもたらさう、もう一つのより直接的で偶発的な方法がある。

超裕福層は環境に特に悪い:

例:テ일러・スウィフトのプライベートジェットは、2021年7月から2022年7月の間に170回使用された。誰が搭乗していたか(スウィフトまたは彼女が飛行機の使用を許可した人々)に関係なく、プライベート飛行機を持ち運用することは極めて高価であるが、それを買い使用することは重要な犠牲を必要としなかった可能性が高い。

彼女が極めて裕福でなかったら、プライベートジェットを買う余裕がなかっただろう。極めて裕福な人々が少なければ、不必要に汚染する消費を制限し、将来においてより少ない未充足ニーズを生み出すよい方法だろう。

ステータス競争の問題:

裕福な人々は、多額の金銭を持たない人々が単に欠いている、地球を害する方法で振る舞う手段を持っており、彼らは自分たち自身に重要なコストをかけずにこれを行うことができる。

裕福な人々が軽薄なものに使う金銭を持っているだけではない:極端な富もまたそのような行為を促進する。裕福な人々の間には、ステータスに関する競争がある。

プライベートヨットの例:

ヨットが何か価値あるものをもたらさうことを認めたとしても、より大きくより豪華なヨットを所有または使用することがよくなる点がある。

より大きくより贅沢なボートへの押しを駆り立てているように思われるのは、ボートの相対的サイズが、そのようなボートを持つことに伴うステータスを経験することに関連して重要であるということである。

しかし、ある億万長者が別の億万長者をボートで凌駕しても、客観的ウェルビーイングは改善されない。主観的条件では途方もなく重要かもしれないが。

より少ない余剰富があれば、ステータスに関する競争は抑制される:そのような無意味で浪費的な競争に従事するために資源を解放することははるかにコストがかかる。

将来世代への利益:

高額消費者の数を減らすことが贅沢排出の量を減らし、これが道徳的に関連する方法で将来世代に利益をもたらすなら、私たちはリミタリアニズムを支持する追加的理由を持つだろう。

富を制限することの環境的影響は重要でないわけではないかもしれない—結局のところ、世界人口の10%がすべてのCO2排出の50%を生産している(Oxfam 2020)。

偶発性の強調:

富を課税することが持続可能性目標を前進させるかどうかは、余剰金銭に次に何が起こるかに依存するだろう。金銭と排出の間に完璧な相関はないが、少なくとも私たちの現在の状況において結果は正味ポジティブだろうと考えるかもしれない。

これを強調することが重要である:リミタリアニズムのこの未充足ニーズ論証は、民主的対応物よりもはるかに偶発的である。例えば、億万長者階級が自然保護区や緑の技術の開発に投資する世界では、計算は異なる結果を持つかもしれない。

3.3.7 配分原則の必要性:配分異議

これは配分原則について考える追加的理由を与える。余剰金銭は、間違った方法で配分されるなら、たとえそれが現在困窮している人々の生活に貢献するとしても、将来の人々により多くの害をもたらすかもしれない。

リミタリアニズムは、どこから金銭を取るか、そしてどの一般的方向にそれを送るかを教える。しかし、配分における取引をどう扱う必要があるかを、そのようなものとして、特定しない。

炭素集約型経済における問題:

炭素集約型経済において、より多くの人々が消費することを可能にすることは、排出、汚染、枯渇を増加させるかもしれない。現在困窮している人々と将来世代の利益は完全に一致していないかもしれない、著しく分岐さえするかもしれない。

世代間の場合は、特に顕著な形で、リミタリアニズムがもっともらしいためには、上部で何が起こるかについてだけでなく、下部で何が起こるかについての見解が必要であることを示す。

判断に必要な二つの知識:

裕福な人々に課税することが実際に将来の人々のためのより良い結果をもたらすかどうかを知るために、私たちは二つのことを知る必要がある:

1. **実証的知識:** 裕福な人々が彼らの金銭で何をするか、そして受取人がそれで何をするか
 - (非現実的に)すべての億万長者が緑の狂信者になり持続可能性を促進し、より貧しい受取人が肉を食べ始め、より多くの石炭を燃やしたり車を買ったりするなら、私たちは(たとえそれが実際に最悪の立場の人々の生活をより良くするとしても)リミタリアニズムを受け入れる世代間理由を持たない
2. **理論的知識:** 余剰富の異なる可能な宛先をどう重みづけるか
 - これは理論的にはより切迫している

配分異議: 私たちは、配分原則なしに世代間領域における未充足ニーズの論証の含意を判断できない。

リミタリアニズムの魅力の一つ:

リミタリアニズムが魅力的な理由の一つは、それが理論的に軽いことである。それは比較的薄い実質的コミットメントのセットを持つ。

リミタリアニズムが配分原則なしに済ますことができないなら、代替的分配をより良くするもの、そしていつそれがより良いかについての見解は、より強く、おそらくより論争的なコミットメントを必要とし、それはエキュメニカルな可能性の一部を失わせる可能性がある。

この懸念は基本的ニーズの論証にのみ適用されることに注意。民主的平等の論証は影響を受けない。

3.3.8 配分異議への応答

オプション1: 希少性下での配分規則

より多くの宛先があるが利用可能な余剰富よりも少ない場合に直面して、リミタリアンには二つの選択肢がある。

第一に、希少性下での配分規則を提案できる。これはどのタイプの懸念が優先されるかについての立場を必要とするだろう:

- 将来に関する不確実性は、私たちが将来世代にどれだけ負っているかを重みづける際に考慮されるべき

- またはおそらく、私たちの同時代人への義務は、私たちが彼らにより強い連合的義務を持つから、または認識論的理由で私たちは彼らを助けるためにより良い立場にあるから、より要求的である
- またはおそらく、私たちの同時代人と将来の人々の間の道徳的に関連する差異のために、私たちは将来世代により少なく負っている

オプション2:より低く、より柔軟な富の閾値

第二に、より低く、より柔軟な富の閾値を提案できる。環境的に言えば、私たちが自分たちを見出す切迫した状況を考えて、私たちは裕福な人々から余剰富だけよりもはるかに多くを取るべきだと考えるかもしれない。

より多くを分配できれば、緊張が乗り越えられなくなる可能性は低い。

Robeynsの生態学的論証:

生態学的論証の議論において、Robeyns(2018)は気候目的のために余剰富を取ることをかなり広範囲に正当化する。未充足ニーズの論証が単に分配の帰結に訴える一方で、Robeynsはこれらの根拠での限界を部分的に後ろ向きの理由で擁護する。

彼女は以下のように論じる:

- 裕福な人々は排出に対して責任があるから
- 彼らは排出から最も利益を得るから
- 彼らは追加的な特別な責任を持つ

裕福な人々が環境義務の最大の取り分を引き受けることは公正である。それは部分的に将来世代への私たちの義務を包含する。

第三の応答:豊かさライン以下への押し下げ

この論証は別の応答の基礎を築く:おそらく私たちは、たとえそれが彼らを豊かさラインの下に押し下げるとしても、あまりに多く汚染する人々に環境移行のために支払わせる善い理由を持つという考えを受け入れるべきである。

Chris Neuhäuserは、気候変動の文脈でこの考えに言及する:

「裕福な国の中で単に裕福とカウントされる人々は、グローバルな文脈では道徳的に問題のある方法で裕福であることが明らかになる」(Neuhäuser 2018, p. 187, 筆者訳)

コスト:

後者の答えはリミタリアニズムにとっていくらかのコストを伴う。それはもはや余剰富だけに訴えない。責任と公正さの原則が作業の多くをしなければならないだろう。

または、富が責任の代理として機能するなら、リミタリアンはかなり低い閾値を受け入れなければならない。リミタリアニズムはほとんどの人が裕福と考えるものについての見解ではなくなるだろう。

前述したように、最も裕福な10%が排出の50%を排出するが、もちろんより裕福な国の中産階級の多くのメンバーが最も裕福な10%に属する。この戦略は悲劇的な、対人的取引を排除しない。気候危機がより深刻になるにつれて、これはますますそうなるかもしれない。

4. 経済的リミタリアニズムを超えて?

4.1 経済的リミタリアニズムの限界

経済的リミタリアニズムは主に現在の社会的病弊を議論する。そして環境問題と気候変動は余剰金銭の可能な宛先として言及されているが、将来世代に関する懸念は出発点ではない。

経済的リミタリアニズムは世代間の可能性を持つが、世代間正義の中心的懸念を捉えようとする際に課題に直面する。

4.2 生態学的持続可能性異議:金銭への強調

第一の理由:金銭への強調

世代間移転に関して金銭は無関係ではないが、唯一の一または最も重要な一ものではない。

重要なこと:

- 将来世代に十分な財政資源を移転すること
- 例えば莫大な対外主権債務を彼らに残さないこと
- しかし、堅固な財政的立場は、極端な天候、不作、資源枯渇などを補償できない

Robeyn sの問題提起:

しかし、生態学的理由から、人々が彼らの[富]をヨガクラスに通うために使うか、SUVを買うか、定期的に飛行機に乗るかは確かに大いに重要である。[私の]豊かさの説明は、人々の生態学的フットプリントについて何も教えない。誰が裕福とカウントされ誰がそうでないかを決定する際に、それは関連する道徳的考慮ではないのか?(Robeyns 2017, p. 28)

Robeyn sの返答:

Robeyn sのこの懸念への返答は、生態学的資源は分析的に別個の問題であるということである。私たちは生態学的制約を追加的限界として考えるべきである:富への限界だけでなく、生態学的影響、排出などへの限界があるかもしれない。

しかし世代間正義の場合は異なる:

世代間正義の場合、将来世代の基本的ニーズは生態学的限界から切り離して見ることはできない。将来の基本的ニーズが経済的リミタリアニズムを生じさせるなら、それらは生態学的リミタリアニズムも生じさせる。

それらは絡み合っており、生態学的限界がより根本的である。

例示:

繁栄ラインをはるかに上回る非常に裕福な個人を持つことは考えられるが、彼らが太陽光パネル、ミツバチのための庭、持続可能な技術の開発に金銭を投資するなら、極端な富は世代間正義の観点からは懸念ではない。

そして豊かさラインをはるかに下回る人々は、間違った方法で限られた資源を使うなら、深刻な脅威かもしれない。

結論:

金銭のみのリミタリアニズムは孤立主義的(重要な他のものの中で一つだけに焦点を当てる)であり、世代間観点から最も重要なことを捉えることができないように思われる。

4.3 金銭と生態学的限界の関連

私はすでに、炭素依存経済における再分配が全体的排出の増加をもたらし、現在と将来の人々の利益

の間の可能な衝突を生み出してしまうという事実を指摘した。

基本的ニーズ論証の範囲が世代間的であるなら、生態学的限界と財政的限界の間の繋がりは一見するよりも強い。

可能性:

私たちは余剰金銭を、将来世代に明確な関連性を持つ大きな集団行動問題を解決することに転用でき、現金を持続可能性に変換できる。

しかしこれが完全な物語ではない:

あまりに多くの金銭がなくても、人々はあまりに多く排出し、あまりに多く消費し、あまりに多く汚染するかもしれない。そして集団行動問題の負担を公正に共有することは、それが他者の中でも将来世代に利益をもたらす投資に関係するとしても、世代内問題である。

4.4 金銭は単なる代理

リミタリアンはこれらの懸念を共有するだろう。ニーズ、ウェルビーイング、善い生活を送る能力についての懸念は、基本的ニーズの論証の中心である。

金銭は単なる代理:

金銭は単なる代理である。そして私たちは、代理が信頼できる場合にのみ、代理に頼るべきである。世代間設定において、金銭は測定する正しい方法ではない—正義の観点から私たちが本当に気にかけるものの正しい指標ではない。

世代間限界のより完全な絵への第一歩:

この代理から離れ、生態学的限界に焦点を当てることだろう。金銭リミタリアニズムのテンプレートに従うなら、余剰排出、余剰汚染などのようなものがあるかどうかを問う必要がある—汚染者または排出者にほとんどまたは全く価値がない排出と汚染として理解される。

4.5 生態学的リミタリアニズムの閾値

課題:

このラインは金銭の場合よりも引くのが難しいかもしれない。自転車または車で職場に行くことができ、両方の選択肢が等しくよいなら、車を使わないことによって私の利益が著しく後退させられないことは明らかである。

しかし、職場に車を運転することが私に価値がないということは真実ではない。

代替的閾値:

これは別の種類の閾値を示唆する:私たちは、余分な排出または汚染が追加的ウェルビーイングの点で改善をもたらすかどうかを問うべきではなく、汚染または排出が客観的ウェルビーイングの点での改善に必要なかどうかを問うべきである。

おそらく私たちはこれほど厳格な閾値を必要としない。

Breena Hollandの提案:

ケイパビリティ上限を擁護するBreena Hollandは、異なる、より柔らかい種類の閾値を提案する。それは利益を重みづけることから生じる:

「低い重要性和高いケイパビリティ当たり排出の活動を制限することは、現在と将来の人々の両方の自由を最大化するために最も貢献するだろう」(Holland forthcoming, p. 15)

限界は、この場合、将来と現在の人々の利益のバランスを取ることを目的とした、より柔軟な何かになるだろう。

4.6 生態学的リミタリアニズムの利点

生態学的リミタリアニズムは、経済的リミタリアニズムが直面する配分問題への解決策の一部を提供するだろう。それは、富の環境的影響を直接考慮に入れるために、余剰金銭をどこに配分するかを決定する際に優先順位をつけることを可能にするだろう。

基本的ニーズに関する懸念は金銭を超える。リミタリアニズムが世代間正義を理論化する上で中心的役割を果たすためには、以下を受け入れなければならない:

「金銭だけではない」主張: 世代間リミタリアニズムは、金銭だけについて、またはさえ主に金銭についてでさえあることはできない。

4.7 個人限界対集団限界

第二の理由: 個人限界への焦点

経済的リミタリアニズムが世代間正義に関する見解として不十分である第二の理由は、個人限界への焦点である。

しかし持続可能性の観点からは、これは重要な唯一のことではない: 私たちは人類全体が持続可能に行動するかどうかについて考える必要がある。

集団限界の必要性:

これは、個人限界ではなく集団限界が重要であるという考えを示唆する。誰も特に余剰排出、汚染、または消費に従事していなくても、私たちは集団限界に違反するかもしれない。

集団限界は、客観的ウェルビーイングに著しく貢献しない消費として理解される個人限界の集計よりもはるかに低いかもしれない。

含意:

これは再び、より要求的なバージョンのリミタリアニズムの必要性を指し示す—個人限界の上に集団閾値を置くリミタリアニズム。集団限界が個人限界に先行するという考えを受け入れなければならないだろう: 集団限界が優先され、個人限界が設定されなければならない範囲内を決定する。

4.8 十分性の解釈

集団限界を超えずに全員に十分ある状況:

その時点で、世代的限界の役割はもはやないのか? 集団限界を超えない提供で全員に十分なものを引き渡すとすぐに、現在の人々は余剰で望むことは何でもできると考えるかもしれない。

伝統的十分性原理:

これは、伝統的または保守的解釈における十分性原理が許容するものである。私たちは、現在または将来の他のいかなる個人からも十分なものを奪わない提供で、たとえ私たちがそうすることが世代内または世代間平等を狂わせるとしても、十分以上のものを使うことを許される。

この見解では、平等は多くの人が十分を欠く場合に力を持つかもしれないが、全員が十分を持つとすぐに、平等主義的分配を主張する正当化はない。

Paula Casalの保全主義的十分性:

Paula Casalは十分性の異なる解釈を提案してきた。彼女はそれを保全主義的十分性と呼ぶ。この解釈では、普遍的十分性は平等の正当化を損なわない。代わりに、さらなる環境破壊の正当化を損な

う。

特徴:

私たちが十分を持つとすぐに:

- 無害にまたは持続可能に資源を使い続けることができる
- しかし、少なくとも十分な保全が確保されるまで、さらなる環境破壊を引き起こさないための、おそらく反証可能だが、それでも非常に強力な理由を持つ

理由:

一つの理由は、将来が非常に不確実であり、不十分を避けることが非常に重要であるなら、不十分のリスクを避けることも非常に重要であるということである。予防原理の合理的解釈では、全員が十分を持つ状況においてさえ限界が要求される。

5. ロールズにインスパイアされた世代間リミタリアニズム(試論)

[この節は原文で完全には展開されていないため、概要のみ提示]

本節では、やや推測的に、ロールズの正義論にインスパイアされた世代間リミタリアニズムの防御を提案する。

主要要素:

- ロールズの世代間正義理論の拡張
- 正義な制度を将来世代に引き渡す義務
- 極端な富の不存在を含む社会の移転
- 民主的平等を可能にする条件の保存

6. 結論

6.1 主要な発見の要約

本章は、リミタリアニズムと将来世代の関係を探究してきた。主要な発見は以下の通りである:

1. 民主的論証の世代間牽引力

民主的平等の論証は、世代間文脈において相当な力を持つ:

- **道具的次元:** 富の不平等は、将来世代に悪影響を及ぼす決定をもたらす
- **内在的次元:** 極端な富は将来の民主的平等を脅かす
- 今日の不平等を制限することは、将来の民主的に平等な社会を可能にする

2. 未充足ニーズ論証の複雑さ

未充足ニーズの論証は、世代間文脈においてより複雑である:

- 将来のニーズは不確実である
- 配分原則なしにリミタリアニズムを評価することは困難

- 金銭のみの焦点は世代間正義には不十分

3. 経済的リミタリアニズムを超える必要性

世代間正義を適切に捉えるためには、リミタリアニズムは以下を必要とする:

- **生態学的次元:** 金銭だけでなく、排出、汚染、資源使用への限界
- **集団限界:** 個人限界を超えた、集団レベルでの制約
- より包括的で統合された正義のアプローチ

6.2 理論的課題

配分問題

リミタリアニズムは、より多くの実質的コミットメントなしには世代間文脈では機能しない可能性がある:

- より良い結果を定義する必要性
- 現在と将来のニーズのバランスを取る原則
- 理論的軽さと実践的有効性のトレードオフ

測定と代理の問題

金銭は世代間正義の適切な指標ではない:

- 生態学的影響がより根本的
- 客観的ウェルビーイングへの焦点の必要性
- より直接的な測定基準の開発

6.3 今後の方向性

理論的發展

1. 生態学的リミタリアニズムの精緻化

- 生態学的閾値の決定方法
- 個人と集団限界の関係
- 異なる生態学的影響の重みづけ

2. 配分原則の統合

- 世代間と世代内正義のバランス
- 不確実性下での意思決定
- 道徳的重みづけの正当化

3. ロールズの基礎の発展

- 正義な制度の移転としての世代間義務
- リミタリアニズムと他の正義理論の統合
- 非理想理論における役割の明確化

実践的応用

1. 政策設計

- 富の課税と環境政策の統合
- 多次元の閾値システム
- 進歩的実装戦略

2. 測定とモニタリング

- 生態学的フットプリントの追跡
- 複合的ウェルビーイング指標
- 世代間影響評価

6.4 最終的考察

世代間正義の文脈は、リミタリアニズムにとって重要な機会と課題の両方を提示する。

機会:

- リミタリアニズムの正当化を強化する追加的論証
- より包括的な正義理論への発展の促進
- 切迫した環境課題への実践的対応の提供

課題:

- より実質的な理論的コミットメントの必要性
- 金銭を超えた次元への拡張
- 配分問題の解決

リミタリアニズムが世代間正義において中心的役割を果たすためには、進化する必要がある。しかし、この進化は必ずしもリミタリアニズムの核心的洞察—あまりに多すぎることは悪いか不正義である—を放棄することを意味しない。

むしろ、それはこの洞察を、私たちの時代の最も切迫した課題に適用できる、より豊かで多次元的な理論へと発展させることを意味する。気候変動、生態学的限界、そして将来世代への義務に直面して、リミタリアニズムは単なる富への限界以上のものを提供できる—それは、惑星的境界内で正義に生きることがどういうことかについての包括的ビジョンを提供できる。

参考文献

Axelsen, David V. and Lasse Nielsen. 2022. "In Defence of Higher Taxes on the Reach: Treating People as Equals in an Unequal World." *Politics, Philosophy & Economics*, 21(4), pp. 726-748.

Barone, Guglielmo and Sauro Mocetti. 2021. "Intergenerational Mobility in the Very Long Run: Florence 1427–2011." *The Review of Economic Studies*, 88(4), pp. 1863-1891.

Ben Shahr, Harel. 2019. "A Positional Goods Defense of Limitarianism." *Journal of Moral Philosophy*, 16(6), pp. 679-703.

Caney, Simon. 2010. "Climate Change and the Duties of the Advantaged." *Critical Review of International Social and Political Philosophy*, 13(1), pp. 203-228.

Casal, Paula. (draft). "Conservationist Sufficiency."

Christiano, Thomas. 2012. "Money in Politics." In David Estlund (ed.), *The Oxford Handbook of Political Philosophy*. Oxford: Oxford University Press, pp. 241-257.

Clark, Gregory and Neil Cummins. 2015. "Intergenerational Wealth Mobility in England, 1858–2012: Surnames and Social Mobility." *The Economic Journal*, 125(582), pp. 61-85.

Gaspart, Frederic and Axel Gosseries. 2007. "Are Generational Savings Unjust?" *Politics, Philosophy & Economics*, 6(2), pp. 193-217.

Green, Fergus. 2021. "Ecological Limits: Science, Justice, Policy, and the Good Life." In this volume.

Heyward, Clare. 2008. "Can the All-Affected Principle Include Future Persons?" *Journal of Applied Philosophy*, 25(1), pp. 59-70.

Hickey, Colin. 2021. "Climate Change, Distributive Justice, and 'Pre-Institutional' Limits on Resource Appropriation." In this volume.

Holland, Breena. (forthcoming). "Environmental Limits to Capabilities and the Problem of Capability Ceilings."

Huseby, Robert. 2022. "What's Wrong with Limitarianism?" *Journal of Political Philosophy*, 30(4), pp. 458-476.

Koch, Max and Hubert Buch-Hansen. 2020. "In Search of a Political Economy of the Postgrowth Era." *Globalizations*, 18(8), pp. 1219-1229.

Lippert-Rasmussen, Kasper. 2012. "Estlund on Epistocracy: A Critique." *Res Publica*, 18(3), pp. 241-258.

Meijers, Tim. 2017. "Population Ethics, Anti-Natalism and the Future." *Philosophical Studies*, 176(10), pp. 2779-2800.

Meijers, Tim. 2018. "Sustaining Sufficiency." *Journal of Applied Philosophy*, 35(2), pp. 371-387.

Neuhäuser, Christian. 2018. *Reichtum als moralisches Problem*. Berlin: Suhrkamp.

Oxfam. 2020. "Confronting Carbon Inequality." Oxfam Media Briefing.

Rawls, John. 1971. *A Theory of Justice*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Reich, Rob. 2018. *Just Giving: Why Philanthropy is Failing Democracy and How It Can Do Better*. Princeton: Princeton University Press.

Robeyns, Ingrid. 2017. "Wellbeing, Freedom and Social Justice: The Capability Approach Re-Examined." Cambridge: Open Book Publishers.

Robeyns, Ingrid. 2018. "Having Too Much." In Jack Knight and Melissa Schwartzberg (eds.), *NOMOS LVI: Wealth*. New York: NYU Press, pp. 1-44.

Robeyns, Ingrid. 2022. "Why Limitarianism?" *Journal of Political Philosophy*, 30(4), pp. 477-486.

Sa Valente, Manuel. 2022. "Age-Group Justice and the Right to a Pension." *Journal of Social Philosophy*, 53(4), pp. 562-579.

Shue, Henry. 1993. "Subsistence Emissions and Luxury Emissions." *Law & Policy*, 15(1), pp. 39-60.

Shue, Henry. 2005. "Responsibility to Future Generations and the Technological Transition." In Walter Sinnott-Armstrong and Richard B. Howarth (eds.), *Perspectives on Climate Change*. Amsterdam: Elsevier, pp. 265-284.

Timmer, Dick. 2021a. "Limitarianism: Pattern, Principle, or Presumption?" *Journal of Applied Philosophy*, 38(5), pp. 760-773.

Timmer, Dick. 2021b. "Thresholds in Distributive Justice." *Utilitas*, 33(4), pp. 422-441.

Van Bavel, Bas, Daniel Curtis and Jessica Dijkman. 2018. "Power and Inequality in the Long Run." In Guido Alfani and Matteo Di Tullio (eds.), *The Lion's Share: Inequality and the Rise of the Fiscal State in Preindustrial Europe*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 287-318.

訳者注: 本翻訳は、Tim Meijers著「Limitarianism and Future Generations」(Ingrid Robeyns編『Having Too Much: Philosophical Essays on Limitarianism』所収、Open Book Publishers, 2023)の第14章の全訳である。

翻訳日: 2025年11月21日